

モニターやっています

(1)

今日はサークルの飲み会だ。

俺は今日こそはあの子といっぱい話をするぞと意気込んでいた。一旦アパートに戻り、身だしなみを整え、さあとばかりに外に出たところで嫌な予感が背筋を走った。

いや、思い過ぎだど気を取り直して足を踏み出すと、五十歳くらいだろうか、あまり着るものに頓着していないらしいおっさんが俺に近づいてきて、「君」と言った。

背はやたら高い。この暑いのに厚手の背広、それもよれよれのやつを着て、ズボンも折り目なんてどこにあるのかってくらいいしわしわだ。靴は紐が緩んでいてところどころ染みがある。

あまりお話ししたくないなあという俺の心の叫びは、当然のごとく無視された。

「初音ミクを見なかったか？」

「え？ ああ、まあ……。動画サイトでよく見ます」

「違う。その初音ミクではない」

その初音ミクではないと言われても、それ以外のは知らない。そう言えば初音ミクが発売される以前にアイドルだかなんだか知らないけれど同姓同名の人がいて混乱があったという記事を読んだことがある。でも、そのことですかと聞いたらまた「違う」と言われた。

「探しているんだ。どんなことでもいい。気付いたこと、思い出すことがあったら、ここに連絡してくれ」

おっさんはそう言って俺に名刺を渡した。

「どんなことって言われても。だいたい、お探しの初音ミクって人ですか？」

「違う。人ではない」

「じゃあ、何ですか」

「説明できない。どこにいるかも分からない。ただ、この辺りにいるはずなんだ。だから探している」

「探してどうするんですか」

「悪いがそれも話せない。もし手がかりでも連絡してくれたら話すことがあるかもしれないが。それにまだ不安定なんだ。消えたり現れたりする」

ちよつとおかしい人なのかと思ひながら「はいはい」と答えると、おっさんは「では頼む」と言い残して俺から離れていった。

渡された横書きの名刺を見ると、

ボカロⅡサブスタンシエイト研究所

*gatsutaka*

とあり、所在地と電話番号、メールアドレスが記載されていた。所在地はこの近くだ。何か怪しげだ。それに「gatsutaka」って何だ？ ガツタカ？ あのおっさんの名前なんだろうか。サブスタン？ 俺、英語苦手なんだよな。

俺はその名刺をポケットに放り込むと、もうそのおっさんのことは忘れていた。

飲み会が終わり、二次会を途中で抜け出して、俺は歩いてアパートの近くまで帰ってきた。

「十一時半か」

最初の意気込みはどこへ行ったやら。いつもの飲み会と変わらない成果にがっかりして、とぼとぼと歩いていた。今日は飲みすぎた。明日は一日、万年床で寝ることになるのだろうか。

ふうと溜息をつき、T字路の角を右に曲がればアパートの入り口というところまで来て、目の前

を何かが横切ったような感じがした。T字路を俺のアパートのほうから反対側に向けて何かが駆け行った。

人か？ 立ち止まって酔った頭を傾げながら、人にしてはやけに小さいな、子供がこの時間に外にいることもないだろうし、と考えていたら、今度はもう少し大きな影が駆け抜けた。

街灯で逆光になってはつきりとは分からないものの、それは華奢な少女のようだった。左右に垂らした恐ろしく長い髪が印象的だ。

俺は反射的に駆け出していた。あれは、まさか。

T字路に入って左を見る。しかしそこには住宅街の道があるだけで、何も、誰もいなかった。

(2)

酔った身で走ったのは失敗だった。動悸と息切れがひどい。

アパートに帰った俺はそのまま布団に倒れこもうかと思つたが、さっきの影の印象が強かつたので思い留まつた。あのおっさんから貰つた名刺を取り出してもう一度見てみる。パソコンを立ち上げて、念のために「ボカロサブスタンシエイト研究所」を検索した。でも何も出てこない。

思い切って名刺にある番号に電話してみた。

「もしもし。あの、今日お会いして名刺を頂いた者ですが」

「見つかったか」

「あ、いえ、あの」

「どうなんだ」

おっさんはすごい勢いで訊ねてきた。俺はさっき目撃したことを説明した。ちらっと見ただけだし、酔ってるから自信がないと言ったが、おっさんはミクに間違いないと言う。

そこはどこだと言うので、俺はアパートの場所を説明した。おっさんはすぐに行くから表に出て待っているとやった。面倒に巻き込まれたかなという気もしたが、断るほうが余計面倒に思えたので外に出た。

俺が道に出ると、向こうからおっさんが走ってくるのが見えた。手には捕虫網の親玉のようなものを持っている。

おっさんは俺のところまで来ると、ゼーゼー息をきらしながら、「ミクはどこだ」と言った。

「俺が見たのは二十分くらい前ですから、もういないと思いますよ」

「連絡が遅い。探すぞ。ついて来い」

怒られるのも、命令されるのも理不尽な話だが、酔っていた俺は、まだゼーゼー言っているおっさんにふらふらしながらついて行った。

それから一時間ほど、アパートの近所をおっさんと二人うろうろしながらミクを探し回った。

おっさんはでかい形（なり）をしているくせに割と敏捷で、そのくせ持久力がないのかしょっちゅう立ち止まって息を整えている。それにしても平気でよその家の敷地に入り込んでいくのにはまいった。

おっさんは洞窟探検隊が使うようなライト付きのヘルメットをかぶっていた。でも、光に反応して逃げられたら困ると、そのライトは点けていなかった。

俺がいい加減草臥れて、眠くなって、もう歩く気力を失いかけた頃、前を歩いていたおっさんが振り向いて、止まれと手で合図をした。

そこはアパートからかなり離れた場所、宅地の間に畑が点在していた。と言うか、畑の中に住宅が点在しているというのが正しいかもしれない。街灯も少ないので、真っ暗でよく見えないが、畑

の中で何かが動いている気配があった。

おっさんは、俺に向こうに回って畑の奥から追いついてると、黙ったままボデイラングージで命令した。俺は言われるままにそろそろと端のほうから畑に入り、姿勢を低くして奥まで進んだ。そこで立ち上がり、ドカドカと足音を立てて畑の中を走った。

小さな影と、大きな影が動いた。雰囲気からみて、しゃがんで何かをしていたようだ。俺が二つの影のほうに走り寄ると、まず小さいほうが逃げ出した。

俺はそこに残っている大きな影に突進した。それは動いてはいるものの逃げる素振りを見せなかった。

そしてもう少しでその影に届くというところで畝に足を取られそのまま転倒した。

足首に嫌な感触があった。これは挫いたな。まあどうでもいいや、俺はこれでやつと横になって寝れるんだ。かすかに残った意識でそう考えながら、本当にそのまま寝てしまった。

(3)

目が覚めたら、辺りは明るくなっていた。周り

には誰もおらず、俺はネギ畑のど真ん中で仰向けになって倒れていた。

俺はズキズキする頭を抱えながら上体を持ち上げて座り込んだ。

周りのネギは踏み倒されたり千切れたりしている。幸いなことに道路から距離があり、倒れていないネギの背が高いので、通行人から見られることはなさそうだった。

立ち上がろうとして、足首の痛さに気付いた。そうか、ここで転んだときに捻ったんだ。あれ、そもそも俺、なんでこんなところにいるんだ。それに、この手に残る何か柔らかいものを掴んだような感触は。

そのとき携帯の着信音が鳴った。開いてみると登録していない番号だった。でもなぜか見覚えがある。

「もしもし」

「おお、起きてたか」

「あの、どなたですか？」

「何言ってるんだ。gatsutakaだよ。昨夜は世話になった」

俺は少しずつ昨夜のことを思い出していた。そ

うか、あのおっさんのミク探索に付き合ひわされて、この畑で走って、そして転んだんだった。

「あの、俺なぜここに一人でいるんですか？」

「ああ、すまん。昨日捕まえたミク達を連れて帰るのが精一杯でな、君にまで手が回らなかった。寒くはないし、若いから一晩くらい野宿しても死にはしなかっただろう」

そんなことあつげらんと言われても困る。若くても酔つての野宿は危険だ。

「はい、生きてはいますけどね。でも捻挫してて歩けません」

「今から迎えに行く。もうちょっと待つてくれ」  
暫くしておっさんが車で迎えにきてくれた。肩を借りて歩いて車に乗り込むと、その車は俺のアパートを素通りしてもう少し行った先にある普通の民家の駐車場に入った。

家に入るよう促され、車を降りてから玄関脇の郵便受けを見たら、「ボカロIIサブスタンスエイト研究所」とゴシック体で書かれた何の変哲も無い紙が表札代わりに貼り付けてあった。これじゃあ、歩いてても普通は気付かない。

「君、泥だらけだからまずシャワーを浴びなさい。」

着替えはそつちの部屋にあるから適当に選んでくれ」

そう言われて指差された部屋に入ってみると、そこには男女ごちゃ混ぜで大量の服があった。おっさんが着るにしては若向けだ。開封してない下着まである。

何だこれとは思いながら、自分に合いそうなものを選んでシャワーを浴びた。

泥と、なぜか纏わりついて離れなかったネギ臭さが落ちて気持ちよくなった。  
でも、胸にアザが付いていて触ると少しうずいた。これ何だろう。

「さつぱりしたようだね。病院はまだ開いてないから、それまで説明することにしようか」

おっさんはここでボーカロイドの実体化の研究をしていると言った。詳しい原理は君には分からないだろうからと省略されたが、パソコンでボーカロイドソフトを起動し、歌のデータを作成すると、そのとき指定されたキャラが実体化して目の前に現れるのだそうだ。

いきなりそんな話をされても眉唾だろうが、俺には昨夜のあの体験がある。信じるしかなかった。

研究と言っても殆ど完成していて、今は製品化のための開発段階に入っているそうだ。

各キャラは、パソコンにインストールされた時点で覚醒し、電子データの状態でそのまま自我を持つ。実体化したときにはその身体に自我を投影させ、パソコン内の自我は一時的に消える。その自我は普通の生物で言う本能部分、人間で言えば無意識の部分と、意識部分に分かれている。本能部分は、同一キャラならどれも同じで、意識部分が各マスターによって個性付けされる部分に当る。昨日、研究対象の初音ミクを実体化させたとき、設定ミクスで意識部分が投影されずに本能部分だけで実体化してしまい、そのことに気付く前に逃げ出したというのだ。

「逃げられて動転してしまつてね。今になって考えてみれば、このパソコンを落とせば実体は消えてしまうのに、そのことをすっかり忘れていたんだ」

「あの、じゃあ、昨日の捕り物劇は無意味だったつてことですか？」

「ああ、いや。結果論だけど、意味はあつたよ。君と面白い被検体が現れたからね」

ヒケンタイ？ 何だかとても嫌な胸騒ぎが。

(4)

「あのちっこいのは何だったんですか？」

「あれははちゆねだ」

「はちゆねミクも実体化するんですか？」

「あれはおまけだけだね。で、両方とも本能のままで身体を動かすことができる」

「ネギ畑にいたのは」

「そりゃ君、ミクといったらネギの要素は外せないだろう」

ネギを好むという属性はミクの本能部分に埋め込んであるのだそうだ。だったら俺なんか頼らずに最初っからネギ畑で張ってたら捕まえられるんじゃないだろうか。

「いや、動転してたんでね」

そればかりかい。

「消えたり現れたりするつて言つてたのは何だったんですか」

「逃げたときに姿が見えなくなつたんでね。でもその後に関で足音がしたし、どうも本能だけのときは実体化が安定しないようなんだ。だから君が最初に目撃したときもその直後に消えたんだろ

うね」

「畑では消えませんでしたよ」

「ネギ食べるのに夢中だったからじゃやないかな」

そんなことで安定するのか。

「君が追い立ててくれたおかげで、はちゆねは網で捕まえることができた。ミクのほうは君が取り押さえてくれてたしね。それでまあ、はちゆねを入れた網を片手でかついで、本体ミクの手を引いてここにすぐ帰らなきゃならなかったから、悪かったけど君はそのままにしておいたんだ。いや、すぐ迎えにいくつもりだったんだけど、君の様子を見てたら、実体化の製品版に絶対必要な機能を作り忘れてたことに気付いてね。あのあとずっとそれを作ってたんだ。さつき電話する前に完成してね。それでようやく君を迎えにいったという訳だ」

「転んだ俺より仕事を優先したわけね。その絶対に必要な機能って何だ。」

「そいじゃまあ、ちゃんとした意識ももったミクに会わせようかね」

おっさんはそういってパソコンを操作した。すると、部屋のドアがノックされた。

「入りなさい」

おっさんがそう言うとドアが開き、初音ミクが入ってきた。

ミクは俺の所にツカツカとやってくる、俺の顔を凝視した。俺はドキマギしていた。可愛いもんだなあ。昨夜ははつきりと見なかったが、これがおっさんの言う実体化か。

見とれていたら、いきなり顔面に衝撃が走った。ミクが平手で俺の頬を張り飛ばしたのだ。俺はよろけながらもなんとか踏みとどまったが、口の中で血の味がした。

「あ、ごめんなさい。私、何てことを。でも手が勝手に」

ミクがおろおろしながらそう言った。

「ほう。意識がなくても、本能の部分で記憶してたのか」

おっさんが妙なことを言った。記憶してた？ どういう意味だ。俺が何をしたって言うんだ。俺はおっさんを睨みつけた。おっさんは手を口にあてて、ウププと笑いながら俺に説明した。

俺は昨夜ネギ畑の中で影に向かって走っているときに転倒した。それは敵に足を取られてのことだ。

そのとき、はちゆねは逃げ出したが、本体ミクのほうはその場に留まっていた。おっさんが言うには、どうもネギを食べるのに夢中になっていて、俺に気付くのが遅れたらしい。



イラスト 厨やん

その上、両腕にネギを束にして抱えていたので、素早く立ち上がることもできなかったようだ。その本体ミクの上に俺は倒れこみ、覆いかぶさる形になった。そのとき、俺は殆ど寝に入っていたのでそれ以降のことは覚えていない。

はちゆねを捕獲したおっさんがその網を肩に担いで俺達のところまで来た。たら。

「そのとき君はねえ。うくん、何て言うか」  
おっさんは言い淀んだ。顔はウププと笑ったままだ。



(5)

「何ですか。はっきり言って下さい」

「じゃあ言うけどね私がヘルメットのライトを点けて君達のところに行ったら、君はミクに覆いかぶさって寝てたんだ」

「それはしようがないでしょう。酔ってたし、眠かったし、転んだ拍子に眠り込んだんだから」

「うん、それはそうだ。でもね」

俺は寝ていながら、本体ミクの左右の足を自分の足でそれぞれ押さえ込んで動けなくして、左手でミクの右手首を掴んでこれもまた動けなくして、全体として身動きできないようにした上で、右手でミクの胸をまさぐり揉んでいたというのだ。

「そんな馬鹿な。しょ、証拠はあるんですか」

「あるよ。信じてないって言うのなら見せてあげる」  
ミクは自由な左手でネギを握ったまま、そのネギで俺の頭をガシガシ叩いていたそうさ。

寝ている俺はそんなこと全く気にせず、右手だけひたすら動かしていたらしい。そう言われてみて、シャワーを浴びるまで頭がネギ臭かった理由がわかった。

おっさんは俺を引き離そうとしたが、網を手放

すわけに行かず、片手だけでそれをするのが難しかったそうさ。そのため、ミクの右手首を握っていた俺の左手をほどいて、代わりにおっさんがその右手首をつかみ、俺の身体を足で蹴り返すことでやっとミクを解放したという。だから、俺の胸にアザがあったのだ。俺の手に残っていた感触はミクの胸のそれだったのだ。証拠とやらを見るまでもなく、本当なのだろう。

「君、相当溜まっているみたいだね。ウププ」

俺は、ミクにビンタを張られたせいだけでなく、顔を真っ赤にしていた。

「まあいいよ。過ぎたことは仕方ない。ミクもちやんと仕返ししたし、本能だけでも記憶が残るということが分かったし」

ちつともよくない。ミクは呆れたような顔で俺を見ていた。

それに、俺の様子を見て気付いた絶対に必要な機能って何だ。

「それはね、実体化したボーカロイドへのセクハラ防止機能だよ」

つまり、ボーカロイドを購入したマスターなり、ソフトの使用者なりが、実体化したボーカロイド

に對してよからぬことを働こうとすると、それを  
檢知して実体化を解消する機能を追加したのだそ  
うだ。

「いやあ、君のあの行為を見なかったらこの機能  
なしで製品として出荷するところだった。自分で  
はそんなこと思いもよらなかったからねえ」

「なんだか嘘臭い。それに、そんな機能なんて別  
に無くてもいいんじゃないか？」

「何言つてんだい。ボーカロイドつてのは歌うソ  
フトなんだから、実体化してもそれ以外の用途を  
認めるわけにはいかないよ。何にしても、君のお  
陰だ。札を言う」

そんなことでお札を言われてもなあ。

「ついでに、ボーカロイドに對する暴力行為を防  
止するための機能も付けておいた。まあ、これは  
ボーカロイドを励ますための愛の鞭と区別するの  
が難しいから、それぞれのポカロが判断して働く  
ようにしているけどね」

「逆はどうなんですか。俺、ミクにビンタされま  
したけど」

「ああ、まあ。ボーカロイドはマスターに絶対服  
従だからそんな心配はいらないよ。それに君みた

いによからぬことをやったやつは殴られて当然と  
は思わないかい？」

返す言葉がありません。

「あの、ところで、さっきの部屋にあった沢山の  
服は何なんですか？」

「ああ、あれはね、ボーカロイドが実体化すると  
きに着る服のモデルだよ。公式コスチュームだけ  
じゃ飽きるだろうし、外に連れ出すのに目立つの  
が嫌だと思うマスターもいるだろうしね」

「じゃあ、服もデータ化して、好きなのを着せる  
ことができるんですか」

「それぞれのキャラ限定にしてメーカーのサイトに  
に登録してある服以外は着せることができないか  
ら、妙な格好はさせることはできないね。服を脱  
がせることはできるけど、裸にしたらセクハラ基  
準にひっかかるから、実体化解消してしまうだろ  
うしね」

俺はおっさんの車で整形外科に連れて行つても  
らった。治療費はおっさんが支払った。

「しばらく通院するだろうけど、費用は私に回す  
ように話をつけておいたから、心配いらな」

「当たり前です。それと、あの目茶苦茶になった

ネギ畑はどうするんですか」

「これから持ち主のところにお詫びに行く。君もちよつと付き合つてくれ。『甥が酔っ払つて入り込んで暴れた』ってことにしとくから」

「甥って俺ですか？ やですよ。そんなの」

「おや。こんなところにプリントしたデジタルカメラの画像が」

おっさんは背広のポケットから写真を取り出した。それにはネギ畑の中でミクに覆いかぶさっている俺が写っていた。横を向いた顔も、何やらやっている右手もしっかり写っている。

「あのヘルメットはデジタルカメラ機能もあるんだ。君が来なくても、この写真を見せて謝るから、どっちでもいいよ。でも一緒に来てくれたら、この写真は出さない」

「脅迫だ」

「違ふよ。取引つて言つてね」

「その場面はネギと関係ないじゃないですか」

「君が一人で寝てる写真もあるから」

「くっそう。……分かりました。行きます」

「あ、そう。じゃ、この写真は記念に君に上げる」  
畑の持ち主は怒っていたが、あの畑のネギを全

部引き取ると言つておっさんが何か手渡ししたら途端に態度が変わった。

「研究開発費はメーカーから潤沢に貰つてるからねえ。ネギはミクが食べるから沢山あつても困らないし」

(6)

その二ヶ月後、おっさんが俺のアパートにやってきました。

「足はもう治つたみたいだね」

「はい。お・か・げ・さ・ま・ま・で。今日は何の用ですか」

「実体化ソフトのパイロット版ができたから、君にモニターやつてもらおうと思つて」

おっさんはそう言う俺のパソコンを勝手に立ち上げて、持ってきたDVDから初音ミクをインストールしてしまつた。

そして、データをちよいちよいっと入力したら、俺の部屋のドアがノックされた。

「開いてるよ。入つて」

おっさんがそう言うのとドアがゆっくり開いて初音ミクが俺の部屋に入ってきた。

「あの、どちらが私のマスターですか？」

「ああ、こつち。彼が君のマスターだからね」

「マスターこれからよろしくお願い致します」

ミクはそう言つて深々と頭を下げた。つられて俺も頭を下げた。

「君専用のミクだからね。大事にしてやってくれ。つまらない気を起こしても大丈夫。防止機能で守られるから」

「何が大丈夫ですか。守られるのはミクのほうでしょう。俺、困りますよ。またビンタされたりしたら」

「ああ、このミクはあのミクとは違うから、事件の記憶はないよ。ビンタされるとしたら、また君が事件を起こしたときだね」

「いや、もうしません。しないとします。つて言うか、俺ホントに困るんですけど」

「改めて言つとくけど、ボーカロイドは歌うソフトなんだから、それ以外の用途に使っちゃ駄目だからね」

「あの、俺の話聞いてます？」

「彼女代わりに外に連れ出すのはOK。でも彼女じゃないんだからそのつもりで。それと、セクハラ基準は軽微から重度まで四段階あって、軽微の

ときはこのミクの判断で許容されることもある」

「軽微って例えば何ですか？」

「それは私も知らない。段階の設定はメーカー側でやったから。それと、セクハラによる実体化解消があつたときは、自動的にメーカーのサーバーに段階データ込みで通報されるからそのつもりで」

「それじゃ怖くて何もできないですよ」

「何かするつもりなのかい？ それから、二回続けて実体化解消したら、実体化機能そのものがロックされるからね」

「何もしませんつてば。ロックされたらどうなるんですか？」

「歌はパソコンのスピーカーから聞こえるから問題ないよ。ロックの解除方法はメーカーに問い合わせせてね」

「そんなみつともないことできないですよ」

「だから、ロックさせなきゃいいんだ。さつきから君の言うことを聞いてると、いかにも何かしらすつて言つてるみたいだね」

「・・・」

「そいじゃ、私は帰るから。そうそう、このパイ

ロット版からは本能と意識の分離実体化機能は削除してあるから安心していいよ」

「あの、モニターって何かレポートでも書くんですか？」

「いや、何もしなくていい。ときどき私が様子を見にくるから」

また来るんかい。

「君がある意味一番標準的な反応を見せるような気がするんでね。歌わせることにあまり興味がないユーザーの、つてことだけど。その様子が分かれば、対策を製品版に反映させることもできるだろうからこつちとしてもありがたいんだ」

ありがたくない。

「謝礼も出るしね」

ありがたい。

「それじゃ、また来週来るよ。あ、そうそう。このメモリーに歌のデータが入ってるから、ミクに歌わせてみて」

こうして俺のボーカロイド実体化ソフトモニター生活が始まった。

おっさんから貰ったデータを歌わせてみたら、ほれほれするような歌声だった。

「マスター。私に沢山の歌を歌わせて下さいね」  
「あ、俺、頑張るから」(了)